

祭 儀
▽月次祭 8月1日(金) 午前10時 神 殿
▽月次祭 9月1日(月) 午前10時 神 殿

平成26年 7 月 10 日 (木曜日) 國學院大學学報 第626号

別冊 2014
夏号
定期号(毎月10日発行)
一部20円

K:DNA

K:DNA——創立132年目を迎えた国学院大学の「遺 伝 子」… 個人・個性を尊重する校風 若いエネルギーが未来を変える

國學院大學学報

●発行 国学院大学 〒150-8440 東京都渋谷区東四丁目 ●電話 03(5466)0130 ●FAX 03(5466)0528
●E-mail kouho@kokugakuin.ac.jp ●URL www.kokugakuin.ac.jp
●編集 総合企画部広報課/学生アドバイザーメディアチーム[森淳(チーフ・経営3)/赤羽政哉(サブチーフ・法4)/林歩実(サブチーフ・経営4)/福沢孝子(編集長・日文3)/安藤新菜(経営4)/木下透(法4)/加瀬詩織(外文3)/高村孟司(法3)/大崎麻里(経2)/落合遥香(法2)/小林雄貴(外文2)/田中啓友(経2)/土橋菜央(法2)/平野玉葉(経2)/大塚直哉(外文1)/記伊帆奈美(経ネ1)/古積可奈子(外文1)/山口佳那子(法1)/山口真由(法1)]

その他主要記事の掲載面

- P.1~4—●特集「国学院雑誌の今昔～創刊120年記念～」
P.2~6—●NEWS & TOPICS
P.5—●若木が丘だより
●文系解体新書
「神道文化学部・茂木貞純教授」
P.6—●突撃!!学生記者！
「FM ヨコハマ ラジオ番組DJ光邦さん」
●没たま奥の細道
「川崎市多摩川緑地バーベキュー広場」
●院友ネットワーク
「小学校教師・三瓶大さん」
P.7—●K-Club Activities「水泳部」
●潜入！国大生24時！「伊勢友彦君(神文2)」
●インフォダイジェスト
P.8—●朝食は健康への第一歩
●こくびょんのおさんぽ「トレーニングルーム」
●編集後記

お知らせ

「FM ヨコハマのオリジナルグッズと光邦さんサイン入りステッカー」を5名様にプレゼント

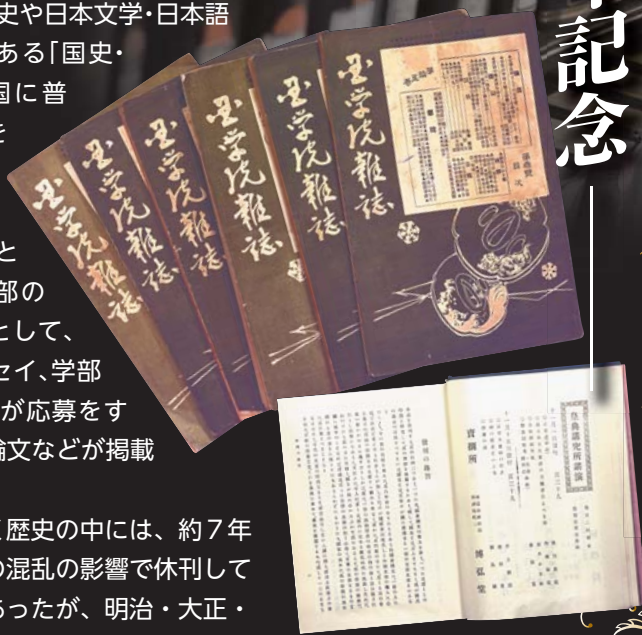
アンケートに回答してくださった方の中から抽選で5人の方に、今号「突撃!!学生記者!」で紹介したFM ヨコハマのオリジナルグッズと番組パーソナリティ光邦さんサイン入りステッカー(詳細は6面に記載)をプレゼントします(締切:8月31日)。①今号の満足度5段階(低1~5高)②今号で面白かった記事の感想、③プレゼントキーワード<〇〇〇〇〇(ヒントは周波数84.7MHz)>、住所、氏名、所属(在学生<学科・学年>、保護者、院友<本学卒業生>、本学・本法人教職員、その他のいずれか)を明記の上、ハガキ・FAX・Eメールで国学院大学広報課(連絡先は1面上記参照)までお送りください。また、QRコードからEメール作成画面を開くことができます。
なお、当選者の発表は、商品の発送をもって代えさせていただきます。
お送りいただいた方の個人情報には法令に基づいて取り扱いいたします。



本 学には、国文学関係の雑誌として古い歴史を持つ「国学院雑誌」がある。明治27(1894)年に刊行し、今年で創刊120年を迎えた。同誌は、日本文学や国語学、民俗学、神道学など、本学が長年積み重ねてきた研究成果を集めた月刊の学術誌だ。国の歴史や日本文学・日本語学の研究である「国史・国文」を全国に普及することを目的に誕生した。現在は文学部と神道文化学部の月刊機関誌として、論文やエッセイ、学部生・大学院生が応募をする学生懸賞論文などが掲載されている。

120年続く歴史の中には、約7年間戦中戦後の混乱の影響で休刊していた時期があったが、明治・大正・昭和前期の雑誌の中には当時の世相や学内の出来事を記載している記事も見られる。現在の同誌は学術研究

国学院雑誌の今昔 創刊120年記念



①明治期の国学院雑誌
⑦国学院雑誌第1巻第1号の1ページ目



現在の国学院雑誌

の発表の場としての役割が多いが、創刊当初は、読者の質問に答えるページ「応問(別項参照)」や、当時の本学の様子をうかがい知ることができる「いほう」など話題は多岐に渡っていた。本学は、明治中期に2度の火災に遭い、当時の資料がほぼ燃えてしまったため、創立当初の本学の歴史を知る上でも、同誌は重要な役割を果たしている。

今回、私たちは同誌の創刊120年を記念して、この長い歴史をさかのぼり、明治・大正・昭和に、本学の研究・教育を担った賢人たちを調査。さらに、現在編集委員長を務める野呂健文学部長や、昨年の学生懸賞論文で佳作に選ばれた松浦里彩さん(博後史2)に、現代の同誌の担う役割や意義、そして未来について話を聞いた。

古い「国学院雑誌」を読み解くと、教員の人柄や授業での一面をはじめ、当時の本学の様子が見えてくる。同誌創刊以来の本学の姿を少し覗いてみてほしい。《記事》平野

スマホをかざすと動画が見られる

かざすAR
ダウンロードと使い方
アプリをダウンロード(無料)

- ① iPhoneは「App Store」、Android端末は「Google Play」を開き「検索」をタップ。
- ② 検索窓に「かざすAR」と入力し検索。
- ③ 検索結果から「かざすAR」を選択します。
- ④ 「iPhone」[無料]ボタンを押すと「インストール」と表示され、インストールボタンをタップするとパスワード入力画面が表示されます。ご自分の「Apple ID」とパスワードを入力し「OK」ボ

タンを押すと、自動的にインストールされます。
《Android》「インストール」ボタンをタップするとダウンロードが始まり「インストール済み」と表示されると完了です。
⑤ 位置情報を利用しますか?と表示されるので「OK」ボタンを押します。数秒立ってカメラモードになり、画像を読み取れるようになります。

ご利用端末について

- ◇iOS 4以上を搭載したiPhone、iPadおよびAndroid OS2.2以上を搭載したAndroidに対応しています(一部対応していない端末もあります)。
- ◇ダウンロードは無料ですが、通信に費用がかかる場合があります。
- ◇通信環境によって、写真にかざした後、コンテンツが再生されるまで時間がかかる場合があります。



QRコードを読み込める機種では左のQRコードからかざすARの無料アプリを入手できます。



左のマークが付いた写真などにスマホをかざしてみよう

国学院雑誌を彩った賢人たち

今回、私たちは国学院雑誌創刊時からの歴史をたどり、
本学の研究教育における飛躍の一翼を担った賢人たちについて調査した。
調査を進めると、1つの特徴として賢人たちの「人と人とのつながり」が見えてきた。
本学の伝統の一端を、9人の人物と共に伝えていく。



物集高見

(弘化4年～昭和3年)

豊後国(現…大分県)出身の国学者。明治15(1882)年に創立された、国史・国文・国法の研究を主たる目的とする皇典講究所(国学院大学の設立・運営母体)や、草創期の本学で講師を務めた。当時、『広文庫』の編集や多数の著書を手掛けていたことにより多忙であった物集の講義は週に1回で、学生は次の授業を一日三秋の思いで待っていた。しかし、その授業があまりにも難しいので、もう少し簡単にしてくれと頼んだ学

生もいた。物集はそれにひどく憤り、しばらく講義を休講にしてしまったこともあったという。
また、物集は同誌の執筆にも熱心で、明治27(1894)年に発刊された同第1巻第1号では、彼の論説「今様の歌につきて思へる事ども」が巻頭を飾った。以後、演説録なども含めて、同第14巻第11号「群書索引編纂の状況」まで多数の論考を寄せている。

《記事》安藤



芳賀矢一

(慶応3年～昭和2年)

国文学者で、国学にドイツ文献学の方法を取り入れ、近代国文学研究の基礎を築いた功績から、「国文学の父」とうたわれる。東京帝国大学(現…東京大学)の教授を務め、明治36(1903)年に文学博士の学位を取得、後に東京帝国大学名誉教授となった。大正7(1918)年に本学学長に就任。大正9(1920)年の大学令による大学への昇格や、大正12(1923)年には飯田町(飯田橋)から渋谷への校地移転を果たした。

また、本学校歌の作詞者でもある。当時、学生代表から校歌

作詞を依頼された芳賀は固辞したが、「作詞者不詳」を条件に引き受けた。出来あがった歌詞には、見事に建学の精神が歌い込まれていた。こうして国学院大学の礎を築いた芳賀は、「国学院中興の祖」の1人と称され、その胸像が本学の正門左手に建てられている。
国学院雑誌には、本学で教授を務めるはるか前、明治28(1895)年に刊行の同第1巻第4号「国語講習会所感」から論考を寄せている。

《記事》安藤



三矢重松

(明治5年～大正12年)

山形県鶴岡町に生まれ、中学卒業後に上京。明治23(1890)年、国学院の第1期生として入学した。在学時には物集高見と学問上の見解について盛んに議論することもあるなど、雄心をもつ学生であった。本学卒業後、文部省に入省。後に辞職し、中学校教員となる。大阪府第五中学校(後の天王寺中学校)勤務時には、折口信夫や武田祐吉といった後に本学で指導することになる学生に出会う。(第30巻第6号「双涙録」)

柔道家で教育者の嘉納治五郎が開いた亦楽書院で中国人留学生を教える傍ら、本学で講師として国語学を講じた。後に本

学教授に就任。国語学についての研究を深め「三天文法」を完成させたことで、「最後の国学者」と呼ばれるようになる。現在も続く「国文学会」を設立したのも三天であった。大正10(1921)年から「源氏物語全講会」を開き、亡くなるまで源氏物語を講義した。三天の死後、弟子であった折口信夫に受け継がれ、講義は続けられた。折口の死後も折口の弟子により受け継がれる。大正12(1923)年、「古事記に於ける特殊なる訓法の研究」で本学第1号の文学博士号が授与され、本学の文学研究の礎を築いた。

《記事》落合



石川岩吉

(明治8年～昭和35年)

明治28(1895)年卒の国学院第3期生で、明治34(1901)年から本学の講師として、日本倫理学や国民の道徳を講じた。終戦直後の最も混乱していた時期に、国学院大学の理事長・学長となり、本学の維持と発展に尽力した。その功績がたたえられ、今日「国学院大学中興の祖」の一人と称されている。渋谷キャンパスの百周年記念館前には彼の胸像が建てられており(II写真)、日々学生たちを見守っている。

国学院雑誌には、明治42(1909)年から大正4(1915)年の5月号まで編集者として携わっていた。
国学院雑誌の第61巻第12号の「石川岩吉先生追憶号」では、教え子が将来への心配りをしてもらったことへの感謝や、国学院内外での活躍、人柄が記されている。そこからは、石川の国学院大学の維持と発展へ向けての並々ならぬ情熱が見て取れる。

《記事》高村

国学院雑誌の知恵袋

国学院雑誌には、研究者たちの論説のほかにも、読者が詠んだ詩歌を本学教授が添削する「詞林」や、皇典講究所や本学の情報を伝える「彙報」などがあった。それに並んで掲載されていたものに、「応問」(同第1巻～第26巻に掲載)がある。読んで字のごとく、読者からの問いに応じるコラムのことだ。現代でいうネット上の質問サイトに似ているかもしれないが、今のように「誰でも自由に好きなことを質問できる」という訳ではなかった。

第一に、応問に投稿できる人は同誌の「賛成員」に限定されていた。賛成員とは、「国学院の事業に賛成する者」をさす。当時、本学の経営状態は思わしくなく、基金の募集が焦眉の急であった。基金を募る上で「賛成員」が設けられたのだ。

賛成員は、金品を寄付した特典に、国学院雑誌を手にすることができた。また、その他の特典として、国学に関する質問(応問)や歌文の添削(詞林)を受けることができた。

第二に、その賛成員たちが投稿できるのは「国学に関する質問」で、その多くは古典の解釈や字句の解説を求めるものであった。しかし、同誌第3巻第10号に応問の再定義が掲載されていることを踏まえると、国史・国文と全く関係ないことを質問する者も少なくなかったであろう。そこで、実際に投稿された「定義外の質問」をいくつか紹介したい。

《記事》安藤

◆なぜ「拍手」を「柏手」と呼ぶのか？

神社に詣でると神前で「二礼二拍手一礼」の作法で拜む。神を拜する際に行う「拍手」は、手を拍つことで「柏手(かしわで)」とも呼ばれる。「応問」では「拍手」を「柏手」と言つことに疑問を抱いた人が問いを投げかけている。

「応問」には、本当に単純なミスから生まれたと書かれている。「牛馬問」という書によると、もともと柏手と書いていたものを「柏」と「拍」が似ている字のため、日本の世の中で誤って広まってしまい、後に仕方なく木偏に改められたそう。生真面目な日本人らしからぬおかしいミスである。

ちなみに拍手は、神を拜む場合のみと考えられがちだが、天皇に拝調する際にも欠かさず行っていたそう。

【出典…応問録第2巻】

《記事》山口(佳)

平成26年度全日本学生柔道優勝大会
～男子第63回、女子第23回～

6月28日・29日に日本武道館で全日本学生柔道優勝大会が開催され、男子の部では本学柔道部をはじめ全国各地の予選会を勝ち抜いた全62校が出場した。

本学は、1回戦で名城大学と対戦。余裕のある戦いぶりでも5勝1敗1引き分けと圧倒して、2回戦に進んだ。

続く2日目、本学は2回戦で昨年度ベスト8の順天堂大学と対戦。五将の地崎亮祐君(経4)が優勢勝ち、副将の本多裕史君(健体3)が一本勝ちをおさめ、2勝1敗4引き分けで3回戦へと駒を進めた。

ベスト8進出をかけた3回戦では、大会優勝回数11回を誇る強豪・天理大学と対戦。先鋒・次鋒と果敢に攻めていくものの一本負けを喫してしまう。しかし、五将の

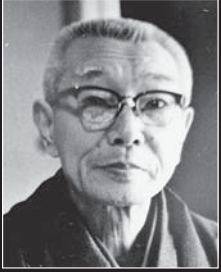
地崎君が粘り強く攻め引き分けへと持ち込み、中堅の加藤翔弥君(日文2)が一本勝ちで一矢を報いた。しかし、後が続かず本学は1勝4敗2引き分けで敗れ、昨年に続くベスト16が決定した。

大会は、東海大学が大会7連覇(通算20回目)を達成し、幕を閉じた。

《記事》木下

《写真》赤羽・加瀬

相手選手に攻め込む
三将の桑崎涼輔君(経2)



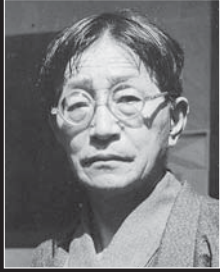
いまいずみただよし
今泉忠義

(明治33年～昭和51年)

三矢重松、折口信夫に師事し、「折口信夫の五博士※」のうちの1人である。40年にわたる日葡辞書や、源氏物語の現代語訳や語法の研究で知られている。それと同時に、非常に愛妻家であったことも知られている。

今泉は、和服に袴をつけ、髪は坊主刈りにしていた。神経質でカンが鋭いが、一見ひょうひょうとした小柄な人だったと、本学の出身で、今泉の教えを受けた徳田政信は国学院雑誌第78巻第11号「今泉忠義博士追悼号」の中で人柄を表している。今泉の源氏物語の講義は単位取得が難しいことで有名。同追悼号に寄稿している、当時本学庶務課長の山崎豊彦によると、文学科は3年次に今泉の「国語学演習Ⅱ」の履修を余儀なくされたが、単位を取得することが難しく、3年次で取得する学生は1

※折口より博士号を授与された高第5人を指す。今泉の他、西角井正慶、高崎正秀、藤野右友、大場磐雄がいる。



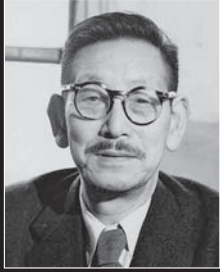
おりくちしのぶ
折口信夫

(明治20年～昭和28年)

折口の名、信夫は「しのぶ」と呼ばれているが、これは親が付けた名前ではない。本名は「のぶを」で、「しのぶ」の読み方は本学在学時から言い始めたらしい(小学校時代からの友人である岩橋小弥太談・第69巻第11号「折口信夫博士の思出」)。

折口は、大阪府第五中学校(後の天王寺中学校)在学時、本学入学後にも師事する三矢重松(当時、同校教師)に出会う。中学生という学問が完全に身に付いていない生徒に対して、古事記など国文の講義を行い、自国の文化の素晴らしさを伝える三矢の姿勢に感化され、学問に関心を持つようになった。(第30巻第6号「双涙録」)

中学を卒業後、上京し本学へ入学。在学中は、三矢に師事した。3年生のときには金田一京助に出会う。後に、金田一は「心から天才だと思った人、2人のうち1人が折口信夫氏だ」と評している。(第69巻第11号「折口・武田両博士の思出」)



きんだいちきょうすけ
金田一京助

(明治15年～昭和46年)

アイヌ語研究の先駆者で、大正11(1922)年に、本学の教授に就任し、言語学や国語学を講じた。昭和7(1932)年には、北海道・樺太へ赴き、アイヌ民族特有の言語や民俗、ユーカーラ(叙事詩の意)を調査し、その成果をまとめた「アイヌ叙事詩ユーカーラの研究」で、学士院奨励賞を受賞した。若手県盛岡市からは、盛岡市名誉市民第1号の称号を贈られているほか、昭和29(1954)年には、文化勲章が授与された。同

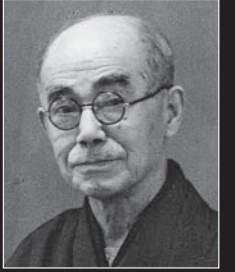


よさのあきこ
与謝野晶子

(明治11年～昭和17年)

日本の歌人、作家、思想家で、本名は与謝野志よつ。ペンネームの「晶子」の「晶」は、本名の「しよ」から取ったと言われている。彼女の主な作品は「みだれ髪」の他、源氏物語の現代語訳を著した「新訳源氏物語」などがある。

国学院雑誌における与謝野の論考は、第37巻第9号「田中文相に呈す(仮名遣改定問題(一))」と第38巻第2号「私の歌を詠む心持」の2つが残されている。前者は、「仮名遣改定問



やなぎだくにょ
柳田國男

(明治8年～昭和37年)

日本国民の日常生活文化の歴史を探究する日本民俗学の創始者であり、「日本民俗学の父」と呼ばれている。代表作には、民間伝承に焦点を当てた「遠野物語」がある。日本各地を巡り、伝承や方言、習俗などを研究した。昭和26(1951)年に本学大学院文学研究科教授となり、神道を講じている。

それぞれの地域で暮らす人々の生活文化の解明を目的とする民俗学において、文献から伝承や方言を探ることには限界があるとし、実際にその土地を訪れるフィールドワークから民俗資料を収集することを重視していた。

昭和14(1939)年に刊行された国学院雑誌第45巻第5号に掲載されている論文「国語の将来」の中に、「日本は言葉の

改まり易い国」という記述がある。当時は流行の語が多く、人々は気軽に古くからある言葉を棄ててしまっていたと記されている。現代の日本でも毎年多くの流行語が生まれ、言葉の意味合いが変わってきている語もある。現代だけでなく、柳田の活躍した約75年前でも言葉の変化や流行語が繰り返されていたことが垣間見える。

柳田は、国学院雑誌第55巻第1号「折口信夫博士追悼号」の中で、本字のことを「学生の学びへの熱意は必ず誰かに引き継がれていく学校だ」と評している。この思いは、現在の学び舎にも息づいている。

《記事》平野

題」の特集号にあつて、新仮名遣いに対する危惧を述べたもので、「横浜貿易新報」から転載されたものである。後者は、与謝野が本字に招かれて行った講演の載録で、彼女が歌を詠むようになった経緯などが語られている。当初は彼女の研究分野である源氏物語や紫式部について語るつもりであったが、年末で多忙だったために「私の歌を詠む心持」を題目として簡単な話をすることにしたと同誌には書かれている。

《記事》安藤

郷の詩人、石川啄木とは小学校以来の親友であった。本学教授時代の逸話は、息子の春彦によつて、昭和47(1972)年の同誌第73巻第11号「金田一京助博士追憶号」に掲載されている。本学の教授となる折口信夫を当時教え子としてもらったことを自慢の種にしていたこと、アイヌ語の研究をしていた教え子にまつわる逸話、アイヌ語研究への思い入れが、当時の本学の様子も交えて描かれている。

《記事》高村

折口は本学卒業後、柳田國男の高弟となり民俗学を志す。大正5(1916)年、本学内に「郷土研究会」を創設し、柳田と共に研究を進めた。柳田は「折口君は、古典に対する理解が人よりはるかにずば抜けているので、古典から日本の古い姿を解している」と称賛している(第55巻第1号「郷土研究会の想ひ出」)。

折口には、歌人・釈迦空としての一面もあり、数多くの歌集が残されている。また、その歌碑は全国各地に建てられ、その死から60年以上経った今でも、折口の歌は愛されている。本紙では毎号(K・DNA除く)1面に、釈迦空の歌を掲載している。特に3月号で「卒業する人々に」の題で掲載される歌は、学内外でよく知られた一首だ。

櫻の花ちりぐにしも わかれ行く 遠きひとりよ 君もなりなむ(春のことぶれ)

《記事》落合

◆頭を北に置き、西を向いて寝る理由は？

「北枕」という言葉に「縁起が悪い」という印象を受ける人は多いだろう。しかし本来の意味は、頭北面西という、釈尊(釈迦牟尼、ブッダ)入滅の様子である。北枕のイメージは後付けであったのだ。そう考えると釈尊が行っていた頭北面西をそのようなイメージで忌み嫌うのは、いささかもつたないという印象を受ける。例えば頭北面西の効果の一つ挙げると、頭を北にして西を向いて寝ると、体の右側が必ず下になるといふことである。食べ物を消化する時に右側を下にすると、胃は左側に膨れているので重力によって食道から十二指腸まですっきり繋がる。そうすると消化を妨げにくいと言われている。

「食べてすぐ横になると牛になる」ということわざがある。健康上よくないというのだ。しかしどうしても横になりたいたいと思ったら、釈尊を倣って頭北面西を実践してみたいかがだろうか。今までの「罪悪感」が、少し「高尚」な気持ちに変わるかもしれない。

【出典：国学院雑誌第10巻第3号】

《記事》小林

◆切腹はいつから始まった？

大河ドラマなどの時代劇でよく見かける「切腹」。主に武士の自害の方法として広く認識されているが、その起源はいつだろうか。切腹が古代から自ら命を絶つ方法の主流ではなかった。

切腹が初めて知られるようになったのは、「保元物語」で切腹に関する記事が書かれてからである。その後、実際に行われるようになったのは鎌倉時代からで、武士道が広まるにつれて徐々に定着したと、「応問」に記してある。当初は武士たちが自身の勇気を示すために行っていた行為であったが、後世には君主の命により腹を切る、つまり刑による自害として行われるようになった。切腹は時代とともに意味が変化したように読みとれる。

【出典：応問集第2集】

《記事》山口(佳)

NEWS&TOPICS

日本の文化理解・フィールドトリップ「歌舞伎鑑賞教室」

7月9日午後2時30分から、歌舞伎鑑賞教室が国立劇場で行われ、本学で学ぶ留学生と、日頃彼らをサポートしているK-STEPアシスタントの学生たち合わせて

約25人が参加した。今回、鑑賞した題目は、日本のシェイクスピアと呼ばれた浄瑠璃作者・近松門左衛門の名作の「傾城反魂香(けいせいはんごんこう)」である。

上演前、作品を鑑賞するにあたり、歌舞伎役者の澤村宗之助さんによる「歌舞伎のみかた」と題した解説があった。舞台道具や音楽の紹介、作品の登場人物を中心とす

るストーリーを説明。

解説終了後、休憩を挟み「傾城反魂香」のうち一幕を鑑賞。今回初めて歌舞伎を目にした留学生がほとんどだった。中には、古典文学研究のために本学で学ぶ学生もあり、前のめりになって興味深く鑑賞したり、周りの留学生に分かりやすく解説したりする様子が見られた。

《記事・写真》落合



参加者が記念撮影

野呂編集委員長に聞く

国学院雑誌の現在と未来

国学院雑誌は創刊120年を迎えた。記念して、今年度は例年より多い4冊の特集号の発行を予定している。今年度の特集と同誌の未来について、同誌編集委員長を務める野呂健文学部長・教授に話を聞いた。

■歴史をつなぐ秘訣

国学院雑誌は、「本学の顔」だ。この歴史をさらに未来へとつなげ、次の世代に受け継いでいくためにも、「学生にはもつと国学院雑誌に興味を持ってほしい。まず、興味のある論文から読んでほしい」と野呂編集委員長は話す。

なぜ120年もの間、毎月発行し続けられたのか。それには2つの理由がある。1つ目は、国史・国文・神道などといったテーマから外れずに、より水準の高いものを発刊し続けていることだ。同誌では、各分野の専門家による査読を経て、論文を掲載する。2つ目は、1冊の中で学問分野などのバランスが偏ることなく、常にオリジナリティ・新展開を求めていることだ。通常号は、1冊の中に「論文」、「談話室(エッセイ)」、「書評・紹介」とおおむね3つの項目で構成されている。論文は毎回数本を掲載するが、掲載される分野は様々で、異なる分野が混在している。野呂編集委員長は国学院雑誌を「さまざまな分野の論文を一度に楽しめる『おもちゃ箱』と表現する。

学術雑誌を毎月発行し続けるということは、大変なことなのだろう。その反面、同誌は、研究者がいつでも研究成果を発表できる場でもある。年に1回しか発刊しない学術雑誌が多い中、同誌は月刊誌であるため、論文の投稿を随時募集している。



■学部のチャレンジ求む

は、本学創立当時から行われる研究の1つ。過去には折口信夫や武田祐吉といった泰斗たちも万葉集研究を行ってきた。創刊120年という節目を機に、この伝統ある研究分野を2回にわたって特集する。

学生に勉学意欲とチャレンジ精神を持つてほしいという思いから、国学院雑誌では「学生懸賞論文」を募集している。これは、文・神道文学部生、別科生、専攻科、大学院文学研究科生が応募できる。例年、3月末に締め切り、入賞者は7月号で発表・論文を掲載する。

学生懸賞論文は、学部生にとっては4年間の成果を示す機会であり、院生にとっては研究者としてのスタート地点である。「どうやって研究者を育てるか」が課題である大学にとって、研究方法や論文の書き方を学生に実践してもらう1つの手段だ。この制度は、学生にチャンスを与えることで、彼らの可能性を広げられることを願って行われている。

■内容の濃い創刊120周年記念特集号

国学院雑誌では、例年11月に特集号(特定分野に特化した号)が発刊される。同誌の創刊が明治27年11月のため例年11月に発刊するが、今年度は創刊120年を記念して、4回(8・10・11・来年1月)にわたって発刊する。内容は、8月「博物館・博物館学の現在」、11月「外国語・外国文化の現在」、10月・来年1月「万葉集―文学・歴史・民俗―」を予定。「万葉集」特集は、昭和44年(70巻11号)以来の特集で、実に44年ぶりだ。国文学の研究

《記事》落合 《写真》平野

国学院雑誌
購読案内

広報課では、「国学院雑誌」の定期購読を受け付けています。年間購読料は3240円(送料込み)です。郵便局の振替用紙(振替口座番号=00110-7-7701)で通信欄に「国学院雑誌購読料」と「購読開始年・月」を明記の上、お申し込みください。

また、バックナンバーについても在庫がある号は、お分けております。郵送の場合送料が別途必要です。広報課窓口での販売も可能です。

「国学院雑誌」購読に関するお問い合わせは、
広報課まで。

総合企画部広報課
(若木タワー2階)

☎ 03・5466・0130

Let's challenge!!
学生懸賞論文

国学院雑誌では、学生の研究奨励を目的に毎年「学生懸賞論文」を募集している(詳細上段記事参照)。「学生懸賞論文とは何?」や「ハードルが高くて応募できない」と考える人が多いかもしれない。応募資格を有する文学部・神道文化学部の学生や、文学研究科の大学院生は多いにも関わらず、応募者がごくわずかであることが現状だ。そこで、昨年度の佳作入賞者で、大学院文学研究科史学専攻美学美術史コースに在籍する松浦里彩さん(博後史2)に、懸賞論文にチャレンジした経緯や研究者を目指す現在の思いなどについて話を聞いた。



松浦里彩さん
(博後史2)

国学院雑誌のススメ

国学院雑誌とは「学部生にとっては先生が書いた物語。大学院生にとっては研究のための題材」と松浦さんは考えている。以前から受講している講義担当の先生が書いた論文や、自身の専門分野の論文が掲載されている号をよく読み、レポート作成などで活用していた。松浦さんは「興味ある分野の論文から読めばいい」と話す。レポートや論文の参考文献に使えるかなといった軽い気持ちで、多くの学生に手に取ってほしい。

きっかけは偶然見つけたポスター

松浦さんが同懸賞論文に応募をしたきっかけは、学内に貼られているポスターを偶然見かけたことだった。指導教員である藤澤紫文学部教授の後押しもあり、投稿を決意した。

また、大学院修士課程での成果である修士論文を、この懸賞論文によって形に

残したいという思いもあった。今回、応募した題材は、松浦さんが大学院に入学以降、研究を続けている、有田焼の代々続く陶芸家「酒井田柿右衛門」の作品だった(同誌第114巻第7号に掲載)。

佳作入賞が決まったとき、「入賞できたに驚いたそう。それと同時に、修士論文を形にするという願いが叶うことに対する喜びを大いに感じた。このとき、「この入賞を、今後の研究を続ける上での1つの糧にしていきたい」と思ったそう。

丁寧に取り組んだ2カ月間

論文執筆にかかった時間は意外にも短い。学生懸賞論文のポスターを見つけたのは1月のこと。締め切りは3月末のため残された時間は少なく、すぐに準備を始めた。修士論文は既に提出していたので、形は出来上がっていた。担当窓口である本学広報課で情報収集をした上で、

書き始めた。

執筆中に最も苦労したことは、論文の修正であった。修正するだけで1カ月以上かかったとのことだ。この懸賞論文には、400字詰原稿用紙30枚〜40枚以内という字数制限がある。ただこの字数に合わせて削るだけでなく、論を立てなければならない。「論が破綻しないよう気をつけていた」と松浦さんは当時を振り返って話した。

目指すは博士号取得!

博士課程に在籍する松浦さんの現在の目標は、博士論文を完成させ博士号を取得すること。「実績を積んで博士課程を修了したい」という熱意を口にした。また現在、研究に加えて学芸員の資格取得を目指して勉学に励んでいる。懸賞論文の佳作に選ばれた経験を糧に、学芸員・教員・指導者など視野を広げて、進路を考えていきたいと目標を語った。

《記事》落合 《写真》高村・小林

学生部企画女子学生向け
防犯セミナー

7月9日午後0時15分から、渋谷キャンパス120周年記念1号館1202教室で、本学女子学生限定の防犯セミナーが行われ、27人が参加した。同企画は学生部が主催し、犯罪に対する意識を高めることなどを目的に、総合警備保障株式会社(ALSOK)から講師を迎えて実施された。セミナーでは、20代前後の多くの女性

が犯罪に巻き込まれている現代社会の状況について説明をした上で、電車では逃げ場のない位置に立たない、夜道では遠回りでも明るい道を選ぶなどの注意点が示された。そして、犯罪被害を未然に防ぐために誰でも簡単にできる護身術が紹介された。参加者は、真剣な表情で話に耳を傾け、メモをとる姿もあった。

最後は、実際に被害に遭ったときに相手の隙をついて逃げるための護身術を体験。掴まれた手を力を使わず振り払う方法などを、参加者は2人組になって取り組んだ。

セミナーの講師は、被害を避けるために普段の行動を意識して予防すること、それでも万が一被害に遭ってしまったら、1人で抱え込まず身近な人に相談することが大切だと強調した。セミナー後、参加した女子学生は、「今まで他人事のように感じていたが、身の回りには危険が多く存在することを忘れないようにしたい」と話していた。また、参加者には、自分の身を守るための手段の1つとして、ALSOKから防犯ブザーが配られた。《記事・写真》福沢



セミナーを受講する学生たち

外国語科目を担当する教員の多くは、留学など、何らかの形で海外での生活経験を持つ。私も、20代後半に北京へ2年間留学した。もう20年近く前のことである。留学の効用の第一は、現地で生活し、現地の人々の言語や文化を学ぶことにあるが、実は、もう一つ忘れられがちな効用がある。それは、中国人以外の外国人との交流、すなわち、当地に来ている世界各地の留学生と一緒に生活するという点である。

私の留学した大学には、中国人学生が約1万人、外国人留学生が約1000人いた。留学生のうち一番多いのが韓国人で約300人。次が日本人で200人ほどだった。東南アジア各国からの華人(華僑)も100人以上いた。中国の大学は全寮制で、留学生は通常は2人部屋である。私は、留学中ずっとインドネシアの華人と部屋を共にしていた。華人と言っても、彼らの母語はインドネシア語である。私とは普段は中国語で会話するが、ときどき日本語とインドネシア語を互いに教え合い、相手の言葉でごく簡単な会話ができると

留学のもうひとつの意義



ころまでいった。今ではもうインドネシア語をすっかり忘れてしまったが、貴重な体験であった。そして、彼らを通じて、背後にある複雑な事情を見ることもできた。インドネシアからの留学生には、華人のほかにマレー系の学生もいたが、彼ら同士の交流は少なかったようだ。政治・経済・宗教・文化にわたって、我々には見えない溝があることがうかがえた。

毎年、本学から多くの学生が海外へ留学に赴く。残念なことに、留学中、本学の学生だけで固まって行動する人も少なくないと聞く。それでは留学の意義が半減してしまう。留学中は、授業だけでなく、普段の生活からも多くのことが学べると自覚できるかどうか。それによって留学の効果は大きく変わってくるだろう。

針谷壮一(学生部委員・文学部教授)

作品募集

第18回 全国高校生創作コンテスト

第10回 「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト



入賞者の創作コンテスト

本学と高校生新聞社は、今年で18回目となる全国高校生創作コンテスト(創作コンテスト)と第10回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト(伝承コンテスト)を実施する。

創作コンテストは、全国の高校生を対象に、「短篇小説」「現代詩」「短歌」「俳句」の4部門で作品を募集。今年度から審査員に人気作家の桜庭一樹氏、中村航氏を加えた8人による審査で、入賞作品を決定する。

10回目の節目を迎える伝承コンテストは、学校や部、クラスなどの活動として地域研究活動の実践報告をする「学校活動部門」を新たに創設し、全国の高校

生を対象に、地域に存在する伝承文化「地域文化研究部門」と「地域民話研究部門」あわせて作品を募集する。小川直之本学文学部教授・新谷尚紀同教授ら7人の審査員による審査を経て、最優秀賞にあたる「折口信夫賞」など入賞作品を決定する。

両コンテストは、例年多数の応募があり、高校の国語・社会の授業やクラブ活動の一環として応募されるケースも。両コンテストの募集要項は、本学ホームページで確認できる。また例年、入賞作品は1冊の作品集にまとめ、無料で希望者に配付している。詳しくは広報課まで(☎03・5466・0130)。

神道文化学部 茂木 貞純教授

夏祭りの起源は京都にあり



6月から7月の長雨の季節。雨による災害の多さは今も昔も変わらない。毎年この時期に、京都では八坂神社の例大祭「祇園祭」が行われる。今回話を聞いた茂木貞純神道文化学部教授によると、毎年多くの人で盛り上がる祇園祭は、日本の夏祭りに強く影響を及ぼしているという。夏祭りは、どのように始まり、広まり、定着したのか。今年は夏祭りを行う本当の意味を理解し、夏の風物詩を楽しんではいかがだろうか。

平安時代に始まった夏祭り

神道の祭りは、1年間の豊かな実りを神々に祈り、感謝を捧げるもの。主な祭りには、春の2月に行われる五穀豊穡を祈る「祈年祭」や、それに対する祭りで11月に行われる新たな米の収穫に感謝する「新嘗祭」がある。しかし、夏祭りは、これらの祭りと異なる考えから生まれている。「稲作の豊作祈願の祭りは、農村地域から始まったのに対し、夏祭りは少し遅れて平安時代に京都で始まったことが、最も大きく異なる点」と茂木教授は話す。

夏祭りの原点は、平安時代に京都の八坂神社で行われた「祇園祭」が発祥といわれている。この祇園祭は、「御霊信仰」という思いがけない死を迎えた者のたたりを鎮める信仰に由来する祭礼だ。平安時代の京都は、人口増加により疫病が流行。梅雨の時期には、長雨による土砂崩れなどの災害が多発していた。これらが死者のたたりと考えたところから「御霊信仰」は始まった。現在の祇園祭は、災害や疫病の起こりやすい梅雨の季節を乗り切るために7月に行われ、夏祭りの形式を生み出す源流として、京都の夏の風物詩となった。

受け継がれる日本の原風景

祇園祭では、疫病や災害を鎮めるためにご神体を載せたみこしを担ぎ、山鉾と呼ばれる特徴的な山車が町内を練り歩く。みこしや山鉾は祇園祭では、災害や疫病が多発する梅雨の季節を乗り越えようという人々の思いが込められている。



現在、全国各地で6月から7月に行われるこれらの祭りは、祇園祭の影響を受けたものと考えられている。

みこしとは、普段は神社に祀られている神霊が氏子の地域を巡り歩くときや、「御旅所」と呼ばれる場所へ向かうときに、使用される神の乗り物である。また、山車や山鉾は神霊を迎えるために、悪い神霊を祓う役目と神霊がお出ましになるときの目印で曳かれるものとして現代まで受け継がれてきた。

しかし近代では、同じ夏祭りでもみこしを激しく振り動かすことによって神の靈威を高め、豊作を祈願する目的で夏祭りを行う神社もある。稲作において梅雨の季節は、稲の成長を助けるために必要不可欠な時期だ。梅雨の季節に降り注ぐ雨と強い日差しが、日本特有の美味しいお米には欠かせない。夏祭りの形式は、農村地域でも広く受け入れられ、全国的に浸透していったと言える。

今年は、夏祭りの行事に込められた本来の目的を理解し、夏祭りに参加してみるのもよいだろう。

《記事》森 《写真》加瀬

あなたの声が、大学を変える

学生リアル調査 7月14日(月)から

本学では、7月14日(月)から全学部生を対象としたアンケート「国学院大学学生リアル調査」を実施する。同アンケートは、学生の意見を聴取して本学の改善につなげることを目的とした新しい試みで、K-SMAPYの「お知らせ」から専用ウェブサイトへアクセス、スマートフォンやパソコンなどを使って手軽に回答できる。回答期間は7月31日(木)までの約2週間。

設問は、学生の普段の生活習慣、学修行動、施設・窓口への満足度、本学のイメージなど約30項目。ほとんどが選択肢から選ぶ方式だが、自由回答欄も用意されている。集められたデータや意見は、集計・分析を経て、今後の本学の施策に生かされることになる。

アンケートは、K-SMAPYトップページのお知らせ・大学からのメールに記載されているURLから、アン

ケートサイトを開き回答する。回答に協力した学生には、謝礼として、渋谷・たまプラーザ両キャンパスの学生食堂で利用できるチケットがもれなく配信され、朝食やホットスナック、ドリンクと引き換えることができる。また、回答者から抽選で100人の学生に大学オリジナル図書カード(1000円分)が当たる特典も用意されている。

学生リアル調査の結果速報は、12月発行の「K:DNA」冬号で公表する。さらに、来年の学報2月号では、調査結果を詳細に分析した特集記事を掲載する予定だ。本件に関する問い合わせは、学生生活課・たまプラーザ事務課まで。

NEWS&TOPICS

秩父宮賜杯第46回 全日本大学駅伝予選会

6月29日午後5時から、世田谷区立総合運動場陸上競技場で 秩父宮賜杯第46回全日本大学駅伝対校選手権大会関東学生陸上競技連盟推薦校選考会が行われ、本学陸上競技部が出場した。この大会は、11月2日(日)に開催される本戦への出場権

をかけた予選会で、本学陸上競技部は平成18年以来の本戦出場を目指した。

レースは、出場校20校から1校2選手ずつを4組に分かれて、それぞれ10000mを走り順位を競う。各校8選手の合計タイムの上位7校が本戦への切符を獲得する。

時折大粒の雨が降る中、午後5時から選考レースは予定通り実施された。選手たちは、悪条件の中、懸命にチームのために走り、1組目の畑中大樹君(経2)が組1位

でゴールしチームの流れを作った。各選手は粘りの走りで上位に挑んだが、惜しくも総合11位で本戦への切符を掴みとることはできなかった。

前田監督は、「全員が100%の力を出さないと、全日本には行けないということを痛感した。今回の結果をどう受け止めて前に進むかが一番大事」と話した。

箱根駅伝予選会まで残り3ヶ月。今回の雪辱を果たし、箱根駅伝の出場権を獲得できるか各選手の成長に期待だ。

《記事》古積 《写真》森・落合



組1位の力走をした畑中君



若者に伝えたい ラジオ

毎年7月12日は「ラジオ本放送の日」とされている。大正14年の同日に日本で初めてラジオの本放送を開始してから、今年で90年目を迎える。近年、私たち大学生や中高生の間で「若者のラジオ離れ」が起きている。学生記者である私も、日頃ラジオを聴かない若者の1人だ。ラジオの醍醐味はどこにあるのかに改めて疑問に思った私たちは、神奈川県を中心に放送されているFMラジオ局「FM ヨコハマ (周波数84.7MHz)」に突撃した。同局は、本学人間開発学部の教員が出演し、子育てについて語るミニコーナー「SUKU Suku SCHOOL」を放送している。今回は、若者を対象とした番組「Tresen+」(月～金曜・午後4時～午後8時放送)のDJを務めている光邦さんに話を聞き、私たちの疑問について尋ねてきた。



ラジオを“好き”だからこそ工夫

平成22年に、NHK放送文化研究所が国民生活時間調査の中で、日常のマスメディア接触に関する調査を実施。私たちと同世代である16～19歳の人のうち、平日にラジオを15分以上聴く人の割合が0%という結果が出た。

「Tresen+」DJの光邦さんも、かつてはラジオを聴かない若者の1人だったという。そんな光邦さんがラジオDJになったきっかけは、専門学校への入学だった。高校時代、俳優を目指していた光邦さんは「ラジオDJも、『芸能界』という点で同じだろう」と考え、専門学校でラジオDJを目指すためのコースを専攻。卒業後、ラジオDJとしてデビューした。8年前から、FM ヨコハマで「Tresen+」のDJを務めている。

ラジオを届ける側として、全てのことに手を抜かないことが大切であると光邦さんは語る。「Tresen+」では、若者を中心に幅広い年齢層の人に聴いてもらえるように、内容を面白く工夫して放送している。例えば、毎月23日(ふみの日)に「ふみせん」という企画が行われている。メールの投稿は一切読まずに、手書きで届く手紙とFAXのみを読んでいる。この企画は、メールでの投稿が多い中、手書きの手紙やFAXを届けてくれるリスナーを大切にしたい気持ちから生まれた取り組みだ。「ラジオの制作をする人は、みんなラジオが好

き。好きだからこそ、本気でいいものをつくりあげたい、人々の関心を惹きつけたいという強い気持ちがある」と熱い思いを話した。

若者を惹きつける秘訣は？

なぜ現代では若者のラジオ離れが起きているのか。これについては「育ってきた環境が昔と異なる」ためとのこと。昔はほとんどの家庭にラジオチューナーがあり、日常的に聴かれていた。しかし、テレビやスマートフォンなどさまざまな娯楽がある現代では、ラジオチューナーを持たない家庭も多い。ラジオ離れの進行には、ラジオに触れて育ってきたかどうかに関わると光邦さんは考えている。

このような現状がある中で「Tresen+」は若者を対象とした番組として、どのような方法で若者の興味を惹きつけているのだろうか。それは「くだらないことも含めて、何でもやる」ことだという。リスナーも制作者も楽しいことが一番。その中でも、時には真面目な放送もする。いじめや生活保護といった現代の問題について考える時間を設け、10代の若者と40・50代の大人が番組上で電話を通じてお互いの意見をぶつけ合うこともあるという。型にはまったことだけでなく、「何でもやる」というモットーが、若者のラジオへの興味を惹きつけているのだ。

また、光邦さんが若者のリスナーとの関わり方で気を付けていることがある。相談

川崎市多摩川緑地 バーベキュー広場

奥の細道

夏休みの予定にある人も多いであろう「バーベキュー」。川崎市が運営する「川崎市多摩川緑地バーベキュー広場」は、東急田園都市線二子新地駅から徒歩5分の多摩川の河川敷にある。都心からのアクセスがよく、バーベキュー用品のレンタルが充実していることで人気を集め、去年1年間の利用者数は18万人にも上った。

現在ではバーベキュー場として広く知られている「川崎市多摩川緑地バーベキュー広場」だが、市営化される以前はゴミの不法投棄や騒音で近隣住民を悩ませる「無法地帯」であった。そこで、川崎市が3年前にバーベキュー広場を開設し、条例により河川敷の管理を厳格化した。その一環として導入された利用料は、バーベキュー広場を安全に利用してもらうための整備・清掃費用として活用されている。「広場の開設当初は賛否両論あったが、徹底した管理を行っていったことで地域の理解を得ることができた」と管理団体の青嶋さんは話す。地域の信頼を裏切らないためにも、青嶋さんは「バーベキュー広場を利用する際は、地域の方に迷惑を掛けようという意識を、来た時よりもきれいに帰るぐらいの気持ちで利用してほしい」と言う。ルールをしっかりと守ったうえで楽しむのが利用者としてのマナーであろう。そして、バーベキュー広場を利用する際は地域への恩返しとして、地元商店街で買い出しを行いたいものである。

《記事》安藤 《写真》木下



を受けたときや励ますときは「頑張れ」という言葉を使わず、「覇魂」と伝える。「頑張ってる子に対して『頑張れ』と言うと、その子をさらに苦しめるかもしれない」と考えるためだ。このようにリスナーへの心配りをするのも「Tresen+」が人気な理由の1つである。今回の読者プレゼントには、光邦さんのサイン入り「覇魂」ステッカーもある。光邦さんから本紙読者へのエールとして、いただいた。

人を成長させるラジオ

若者のラジオ離れがある一方で、ラジオには、「その人自身を成長させる」プラスの側面もある。リスナーの投稿をDJが読むという“双方向性”を生かし、リスナーは他のリスナーたちの考えや興味を知ることができる。それによって、リスナーが「他人の意見を聞き、考える力」を身に付け、成長できる。リスナーとDJの距離の近さが生み出す、ワクワクする気持ちもラジオの面白味の1つだ。

最後に本紙を読む若者に向けて「自分を

信じて、何事にも一生懸命に取り組んでほしい」というメッセージをもらった。将来、何が役に立つかわからない。ラジオで聴いたことやラジオを聴くという行動自体が、いつか役に立つかもしれない。私たち学生記者も、この言葉を胸に、日々の生活にラジオを取り入れていきたい。

《記事》落合 《写真》平野

本学人間開発学部の教員が ラジオに出演！

FM ヨコハマでは毎週月曜午前11時25分から(情報番組「THE BREEZE」内)、本学たまプラーザキャンパスにある人間開発学部の教授が出演する「SUKU Suku SCHOOL」が放送されている。子育てを頑張っているお母さんたちを応援する番組だ。同学部には「共育・響同」という教育目標があり、これを軸とした子育て論について放送。「お互いに響き合いながら共に成長する」という視点で、子育てをしているかに関わらず幅広く聴くことができる番組だ。

教師へのギャップを埋めるために

東京都町田市立南大谷小学校 教師

今年で創設6年目を迎えた本学人間開発学部。同学部は、学校や関連する教育業界に就職を希望する学生が多く集まる。今回は、2年前に卒業した同学部1期生で、東京都町田市立南大谷小学校に勤務する三瓶大さん(平25卒・121期初教)に、学生時代の思い出や教壇に立って初めて気が付いた教師の本質について話を聞いた。

人間開発学部1期生の苦労

小学校教師の父に憧れ、教師を志した三瓶さんには入学後、1期生ならではの楽しさや苦労があった。入学後は同級生と共にサークルを設立し、自由で楽しい大学生活を送っていた。その反面、自分たちで何もかも考えなくてはいけないという苦労があったそうだ。例えば、テストや教員採用試験の対策など、アドバイスを聞きたいときで



も、相談できる先輩がいない。「だからこそ、同級生と相談し合い、自ら考えて行動していった」と三瓶さんは語る。

児童に「教える」ということ

卒業後、実際に教師として働き始めると、学生時代に小学校の子どもたちと楽しく接することができたのは、担任の先生が作ってきた環境があったからこそだと気付いたという。

昨年度に5年生の担任となった三瓶さんは、「子どもたちに物事を教えるためには、彼らを叱ることも大切だが、難しいことだと感じた」。小学生は、自分の「分からない」という気持ちの表現が苦手だそうだ。まだ知らない言葉のある児童には叱られている理由が分からない時もある。一方的に怒りの言葉をぶつけても児童を傷つけるだけである。三瓶さんは「まずは教師と児童の信頼

院友ネットワーク

関係を築き、そこから子どもたちの気持ちを考えていくことが大切」と語った。在学時の教育実習では、「大好きな子どもたちと触れ合える楽しい職業」として教師をイメージしていた。しかし、担任の先生が児童と信頼関係を築いていたクラスだったからこそ、自分は「大学生のお兄さん」として子どもたちと楽しく過ごすことができていたのだと教師になって初めて分かったという。「単に『子どもが好き』という理想だけでは、教師という職業には気持ちが折れてしまうかもしれない」と三瓶さんは話す。

これからの教師人生

「教師として児童に物事を教えることの難しさ」といった、理想の教師像と教師として教壇に立つ今の自分とを見比べると、そのギャップに落胆させられることがあると話す。しかし、このギャップは、「多くの現場を見学し、子どもだけではなく指導する『先生』を見ることで、少しでも埋まっていくのではないかと」三瓶さんは考えている。教育実習に行くと、学生は子どもを中心にしがちで、先生の児童への声かけの仕方などには注意が届かない。しかし教師になってからは、先生が児童に対しどう接し、どのような行動をとっているか観察し、自分の行動に反映させることが大切

であると、実感するようになったという。

まだ教師生活は2年目、日々成長する子どもたちへの教育という「マニュアル」のない仕事に慣れないと話す。そのような中で三瓶さんは、全児童が大好きで楽しいと思ってくれるような学校を今後作っていきたいと話す。そのためには、子どもたちの好きなことや流行を理解し、より親密な信頼関係を築いていく必要があるという。現在は、まだ学校内で子どもたちと年齢が近いが、どんどん歳が離れると、この気持ちを忘れていってしまうかもしれない。しかし、「この思いはいくつになっても心に留めておきたい」と三瓶さんは強く心に誓っている。

《記事》平野 《写真》加瀬

三瓶 大さん



K-Club Activities

No. 006

水泳部

一丸となって挑む昇格への道

昨年度、本学の水泳部は、関東学生選手権水泳競技大会4部で2位に入り、創部以来の念願であった3部昇格を果たした。現在は8月上旬に行われる同大会を控え、2部昇格を目指して活動している水泳部。今回は、主将の菅原孝義君(経ネ3)に水泳一筋の生活を送ってきた彼の思いと、関東学生選手権水泳競技大会での2部昇格への意気込みについて聞いた。



た。しかし、菅原君はチームが2位での昇格であったことに、今でも悔しさを感じている。大会の最後の種目だったリレーは、本学の結果と他大学の成績次第で、本学の優勝が決まる位置にいた。リレーの種目で菅原君のチームが優勝することはできなかったが、結果として、総合優勝は僅差で逃してしまった。そのときを振り返って菅原君は、「団体として負けてしまい、チームの昇格を喜ぶことができなかった。今まで味わった悔しさと違った初めての気持ち」と話す。

2部昇格を目指し挑戦

今年は同大会で2部への昇格を目指し挑戦する水泳部。「昨年は実力のある選手が入ったことで3部昇格は大丈夫だろうと考えていた。しかし、今年は、同じ力量を持ったチームとの戦い。チーム全員のコンディションをベストまで持っていき、優勝を狙いたい」と菅原君は話す。

6月29日に行われた関東学生夏季記録会では、多くの部員が好成績を残すことができ、今夏の同大会に期待が持てる結果が出た。今年度の関東学生選手権水泳競技大会は8月2日(土)～4日(月)の3日間に行われる。水泳部の今後の活躍に注目だ。

《記事》高村 《写真》田中
《映像》加瀬



写真にスマホをかざすと、水泳部の動画がご覧になれます。



「高校までは、水泳は個人競技のイメージが強く、自己ベストタイムを更新していくことがやりがかった。しかし、大学では個人だけでなく、チームとしての結果を重く捉えるようになった。今は、チームの成長が自分の喜び」と話す。大学で水泳部に入部し、競技に対する意識が徐々に変化してきた。その気持ちは、部の主将になって一段と強くなった。今は、部員がどのようなモチベーションを持って練習に臨んでいるかを把握するため、より積極的に部員の一人一人とコミュニケーションをとり、相談にも乗っている。

「一体感」を大事に

本学にはプールが無い。そのため活動は、主に国立代々木競技場や横浜国際プー

ルなどの外部の施設を利用している。現在の部員は31人。月・水・金曜の週3回練習を行う。大学から水泳を始めた部員も含め、各々が大会へ向けての調整や、自己ベストタイム更新のため、日々練習に励んでいる。菅原君に同部の印象を一言で表してもらおうと「一体感」という言葉が返ってきた。「水泳部は、初心者でも上級者でも歓迎している。チームの昇格という目標だけにとらわれず、初心者の底上げも大事にし、日々のあいさつから練習まで、部員全員が一丸となって取り組んでいる」と話す。

関東学生選手権水泳競技大会では、関東の大学が出場し、男子は1～4部に、女子は2部に分かれている。本学の水泳部は、昨年度3部の昇格が決まる上位2チームの枠を目指して4部を戦い、見事2位に入っ

潜入! 国大生24時!

本学の神道文化学部では、5学部で唯一フレックス制が設けられ、2つのコースに分かれている。昼の時間帯が中心のフレックスBコースに対し、フレックスAコース(以下、フレックスA)は、5～7限の夜の時間帯に、教養総合科目の必修科目および専門教養科目の専門基礎科目が開講されている。今回は、昼間は港区の三田春日神社で実習生として奉仕し、夜間は学生として学ぶ伊勢友彦君(神文2)に話を聞いた。

一人二役の学生生活



土橋：神職に興味をもったきっかけを教えてください。

伊勢：私の父親が神主をしています。その姿を幼い頃から見て、私も将来父親のようになれたらいいなと、憧れを抱いたことがきっかけです。

土橋：なぜフレックスAを選択したのですか？

伊勢：出願の際、どちらのコースにするのかを大学に一任するプランを選んだところ、フレックスAになったからです(笑)

土橋：では、伊勢さん自身が最初からフレックスAを選択したのではないのですね？

伊勢：はい。結果的には、フレックスAに入学して良かったと思っています。在学中は何らかの形で、神社で奉仕したいと思っていました。フレックスAは一日の授業数

伊勢：実家にいたときは、正月の助勤程度しか神社に関わったことがありませんでした。そのため社頭での奉仕の苦労をよく知りませんでした。しかし実際にやってみて自分の想像より大変だと思いました。まず、神社には休みがありません。朝も早く、たまに起きることがつらいこともあります(笑) また、神社は人とのつながりが重要です。コミュニケーション能力を身に付け、参拝者の方との雑談を楽しめるくらい関係を築くことも大切な事柄の一つだと気が付きました。そして、これらを難なくこなす父親の偉大さを改めて実感しました。

土橋：奉仕と大学の両立は大変ではありませんか？

伊勢：奉仕の合間にも大学の課題に取り組むようにして、時間を効率良く使うことを

学生として、実習生として学ぶ

が少ないので、社頭での奉仕に時間を費やすことができます。将来を見据えた活動をするのに適した制度だと感じています。フレックスAには、一般の学生から社会人として働きながら学ぶ学生まで、さまざまなライフスタイルの人がいます。

土橋：社頭奉仕では、具体的にどのようなことをされていますか？

伊勢：主に神社内の掃除をしています。また、祝詞を書いたり、参拝者の方の対応をしたりしています。

土橋：そのような奉仕を通じて気が付いたことはありますか？

心掛けています。授業後に友人と遊びに行くこともありますし、普通の学生と同じように趣味も楽しんでいます。

私のように神社に実習生として登録し、住み込みで奉仕している学生は、本学では十数人程度です。そのため、友人とライフスタイルが合わないこともあります。

土橋：大学では何を学んでいますか？

伊勢：座学の神道史から、実践を伴う祭祀演習まで幅広く学んでいます。大学の講義で学んだことを実際の奉仕で生かせるため、役に立っています。

今後の学びと目標は？

土橋：今後の目標を教えてください。

伊勢：社頭での奉仕で、多くの人にお世話になっています。特に奉仕をさせていただいている三田春日神社の皆さんには、何もわからずに上京した私を受け入れてもらい、日常生活から奉仕まで教えていただいています。その恩返しができるように、大学でしっかり学んでいきたいと考えています。また、将来的には目標としている父親のような神主になりたいと思っています。

土橋：来年度以降、フレックスAに入る後輩にメッセージをお願いします。

伊勢：神職を目指す人は、神社実習など大変なことも多いと思います。しかし頑張って培ったものは将来に生かされていきます。神社で奉仕するということを難しいことと捉えず挑戦してみてください。今まで気が付かなかったものが見えてくるかもしれません。

土橋：伊勢さん、本日はありがとうございました。

《取材》土橋・福沢・平野 《記事》土橋
《写真》福沢



インフォ ダイジェスト

事務局からのお知らせ

大学事務局 夏季休暇中の事務休止日

および事務取扱時間について

7/22(火)から9/20(土)までの土曜日・日曜日・祝日および8/8(金)～8/21(木)は大学事務局を一斉休止する。

夏季休暇中の事務取扱時間は本学ホームページおよび掲示でお知らせする。

後期授業開始について

学部・専攻科・別科・大学院・法科大学院の後期授業開始は、9/22(月)。学年暦については、学生生活ハンドブックや本学ホームページで確認を。

各種学内奨学金の願書を配布

国学院大学奨学金(後期・年額15万円)・カビー奨学金(年額30万円)・あすなろ奨学金(年額30万円)・田村祥浩君記念奨学金(年額15万円)・国学院大学留学生奨学金(年額20万円限度)・教育ローン利子補給制度(年額5万円限度)の要項・願書を左記窓口で配布。出願を希望する学生は、本学ホームページや掲示で募集条件の確認を。本学の奨学金はすべて単年度採用のため、昨年度奨学金受給者も、希望の場合は出願が必要。

(学生生活課・☎03・5466・0146/たまプラーザ事務課・☎045・904・7705)

海外渡航について

近年、日本人を含む外国人を標的としたテロ、誘拐などの重大犯罪が多発しています。また、地域によっては、感染症や紛争などが発生している恐れもあります。

夏季休暇を利用し、海外渡航を計画する際には、外務省の海外安全情報チェック、日本大使館など現地の緊急連絡先の確認、家族・知人への旅行日程・連絡先の伝達、細かな連絡、海外旅行保険への加入などを行い、安全の確保を心掛けてください。

講座・学会等のご案内

法学会懸賞論文を募集

国学院大学法学会では、法学・政治学をテーマとする懸賞論文を毎年1回募集。優秀な作品については、表彰、「懸賞論文入選集」に掲載。

応募締め切りは来年1月8日(木)午後5時。詳細は、法学部資料室(若木タワー7階)まで。

英語で日本文化体験(能楽鑑賞)

文化発信型英語力開発活動イベントとして、英語解説つきの能楽鑑賞体験参加者を募集。10/9(木)午前11時45分観世能楽堂集合、午後4時30分現地解散予定。申し込みは、文学部資料室(若木タワー11階)。証明書自動発行機で参加費1000円を支払った後、証明書を切り取らずに持参、提出。締め切りは10月1日(水)午後5時。詳細は同資料室まで。

その他のイベント等は、本学ホームページでご確認ください。

朝食は健康への第一歩

より良い朝食を学生に

本学渋谷キャンパス3号館のメモリアルレストランで責任者を務める山瀬さんは、昨今の朝食への注目の高さを見て、本学でも朝食を始めたいと思った。大学の協力を得て、山瀬さんの提案は実現に向けて本格的に進められた。初めに気に掛けたことは値段。当初、学食で朝食として提供する食事は300円程度のものを想定していた。しかし、一人暮らしの学生にとっては、300円という料金は大きな負担となる。利用者は伸び悩むだろうと考えた奥山さんは、大学にいくらかの補助をしてもらうよう交渉した。それを大学が快諾、半額を補助することで、現在の150円という、私たち学生の財布にも優しい値段で朝定食を提供できるようになった。

本学の朝定食は、AからDまでの4種類の定食メニューから選ぶことができる。さらに、A定食（和定食・写真）、B定食（洋定食）は、16種類の小鉢から好きな2皿を選べるほか、D定食（パンとコーヒー）のパンは不定期で種類が変わり、

昨年から、朝食の重要性を改めて見直そうという取り組みが全国各所で行われている。実際に、朝食メニューを扱うカフェ・レストランやワンコインで食べられる朝食を提供する各地の大学などがニュースで取り上げられている。本学メモリアルレストランでも学生にもっと朝食への関心を持ってもらいたいと、今年4月から朝定食がスタート。保健室では朝食アンケートを実施した。今回は、開始から3カ月が経過した朝定食を立案・実施する本学生生活協同組合（生協）、専務理事の奥山政和さんと食堂部部長の山瀬清隆さん、そして朝食アンケートを行った本学保健室主任保健師の佐藤明美さん、管理栄養士の稲葉洋美さんに朝食摂食率向上への取り組みとその結果について話してもらった。

テイクアウトも可能だ。「朝定食メニューに豊富な選択肢がある大学は本学しかない」と奥山さんと山瀬さんは口をそろえる。利用者を飽きさせないための工夫の一つだ。

4月上旬に始まった朝定食は、開始直後は利用者数がなかなか伸びなかったが、5月後半以降は連日100食を超えるようになった。積極的な告知活動の効果もあり、利用者数は確実に伸びている。

毎日現場で見ている山瀬さんは、ご飯と味噌汁、魚を中心とした和定食のA定食が圧倒的に人気だと話す。朝はパン食が主流であろう学生や、朝は忙しく、朝食を作る時間のない学生などが好んで食べているのではないかというのが奥山さん、山瀬さんの見解だ。どのメニューも利用者のニーズに合った献立が考えられているが、今なお試行錯誤が繰り返されている。一人でも多くの学生に質の高い朝定食を提供することが、奥山さん、山瀬さん、そして生協の皆さんの思いだ。

朝食をおいしく食べるポイントは生活リズム？

朝定食開始と時を同じくして、本学保健



室では学生の朝食事情を調査する「朝食アンケート」を4月の健康診断の際に実施した。このアンケートの結果を見ると87.9%の学生が「日頃朝食を摂取している」と答えた（グラフ参照）。

その中でも朝食の内容は、「箸、ナイフで食べるもの」と「おにぎりやパンなど、片手で食べられるもの」と答えた学生がおよそ9割にのぼり、意外にも朝食をしっかりと食べているという結果になった。保健師の佐藤さんは、この結果に驚きつつも「朝食を全く、もしくはあまり食べていない学生が朝食を摂る習慣を徐々に身につけるよう指導していきたい」と話す。自分自身で、少しずつ食べようと思う意識を持つこと、そして、朝食を安定して摂る学生の食生活を維持させることが、身体のために大切なのである。

また、朝食を摂らないと答えた学生にも注目すべきだと管理栄養士の稲葉さんは言う。なぜ食べないのか、アンケートで得た回答はさまざまだが、「時間がない」、「朝起きられない」、「食欲がない」という意見が主立っている。朝食を摂らない理由の一つに挙げられた「朝、起きられない」要因は、脳と体にある2つのリズムのずれから生まれる。脳内のリズムは、朝日を浴びるこ



主任保健師
佐藤さん

管理栄養士
稲葉さん

とで、内臓のリズムは朝食を摂取することでリセットされる。人間の生活は、朝から夜、夜から朝とすべてつながっている。朝食が1日の活動を支え、夕食のタイミングと睡眠が翌朝の身体の調子を整えている。

朝食の欠食や夜ふかしは、身体のリズムを崩すことになり、スムーズな起床を妨げる。また前日の夜遅くに食事をすると、就寝中も消化器官が働き続け、起きたときの胃のもたれた症状や食欲の無さを引き起こす。朝食を食べられない学生は、睡眠や食事時間など生活習慣から見直してみてもどうか。生活リズムを整えることで、朝の時間にも余裕ができ、朝食を気分良く食べることができるだろう。

朝食で守られる健康

生協も保健室も「朝食は、一日の最初の食事。一日活動するためのエネルギーを得るのであるから、欠かせないもの」と口をそろえる。特に忙しい人や一人暮らしをしている人は、食べないでいることが多い。だが、その生活習慣を何より自分自身の身体のために一度考えてみてほしい。本学では、学生の健康のために朝食という視点から、さまざまな取り組みが続いている。

《記事》福沢 《写真》加瀬



食堂部部長
山瀬さん

専務理事
奥山さん

いいえ
12.0%

Q.
日ごろ朝食を
摂取しているか

はい
87.9%



本学たまプラーザキャンパスは、体育館やグラウンドなどのスポーツに関連する施設が充実している。そのため、人間開発学部生を中心に、学生が身体や健康について知識を深める最適な環境となっている。今回はその中の施設の1つである、1号館106教室のトレーニングルームを紹介する。

たまプラーザキャンパス

充実した設備

トレーニングルームは、主に健康体育学科やスポーツ身体文化の授業における身体と運動の相関関係を知るなどの目的で設置された施設だ。現在は、授業以外にも、体育部会の競技力向上のための補強トレーニングや、一般学生の健康増進の目的でも開放されている。

ランニングマシンやウエイトマシンなどの一般的にトレーニングジムでよく見かける機器から、背筋を鍛えるシーテッドロウなどの専門的な機器まで約30種

トレーニングルーム

類を完備しており、民間のフィットネジムにも劣らない充実した設備だ。

夏にむけて…!?

このトレーニングルームは本学教職員、学生であれば授業以外の時間帯は、所定の手続きを取ることで、自由に利用することができる。トレーニングルームを利用する学生は「無料で使用できる点」がありがたい。授業の空き時間や、放課後に気軽に利用できる」と話す。

これから夏本番を迎え、薄着になる機会も増えてくる。また、夏休みを利用し



写真にスマホをかざすとトレーニングルームの動画がご覧いただけます。

て、海やプールに遊びに行く学生も多いだろう。トレーニングルームで汗を流し、素敵なボディを作ってから遊びに出かけるのはいかがだろうか。昨年とは一味違った輝かしい夏になるかもしれない。

《記事》土橋 《写真》赤羽

編集後記



興味を持つこと

私は今回、特集「国学院雑誌の今昔」の担当者・4年生としてメンバーを引っ張ってきました。私を含め4人のメンバーが特集担当となり、企画立案から紙面作成までを行いました。

こうして紙面を飾っている特集ですが、専門的な内容を多く含む「国学院雑誌」を取り上げるにあたり、どの角度から読者に伝えていくかという点にとっても苦労しまし

た。なぜなら、特集を担当した4人はいずれも経済学部と法学部の学生で、学問分野が違いう「文学」という題材をどう扱えばいいのかわからなかったからです。そこで、逆転の発想をし、我々のような「文学を知らない人」が読んで面白いと思える記事を書くことにしました。賢人にまつわる意外なエピソードや、今でいう知恵袋のようなコラムを取り上げているのはそのためです。

また、そこには「読者が少しでも国学院雑誌に興味を持てるような内容にしたい」

という思いも込められています。

実を言うと私は今回の特集を担当するまで、雑誌を読んだことがありませんでした。さらには文学に関する知識もあやふやだったため、慣れない文章に心が折れることもありました。しかし、そんな状況であっても「興味を持つ姿勢」を忘れずに、自分の言葉で形にできるよう頑張りました。そうした背景もあり、今回の特集が読者の「興味」にもつながれば幸いです。

(安藤)